

48 格

意味が通することだけを考えれば、下記の斜字体の人称代名詞は(1a-c)で問題ないはずであるが、実際には(2a-c)の格形式にしなければならない。

- (1) a. **Her* likes *he*. b. *I like *he* book. c. *She took care of *he*.
(2) a. *She* likes *him*. b. I like *his* book. c. She took care of *him*.

このように、「名詞的語類が文中で他の語に対して持つ様々な関係を表現する形式」のことを**格 (case)**と呼び、ヨーロッパ言語を含め、言語の大きな特徴の一つである。ちなみに、名詞的語類とは伝統文法では**実詞 (substantive)**と呼ばれていたもので、要するに性 (gender)、数 (number)、格で**屈折 (inflection)** 変化=**曲用 (declension)** する名詞、代名詞、形容詞のことである。

格の種類及び数は言語によって、あるいは(同一言語においても)時代によって異なる。印欧祖語では**主格 (nominative)**、**属格 (genitive)**、**与格 (dative)**、**対格 (accusative)**、**奪格 (ablative)**、**具格 (instrumental)**、**所格 (locative)**、**呼格 (vocative)** の8つがあったと推定されている。しかし、サンスクリット語はこれら8つが全て残存していたが、多くの言語では**格融合 (syncretism)** が進み、ラテン語は6つ、ギリシア語は5つの格形式となっていた。

本書の読者の多くは英語に関心がある方であろうから古英語 (OE) に話を移すと、OEでは原則、主格 (N)、属格 (G)、与格 (D)、対格 (A) の4つが区別されていた。属格は現代の所有格 (～の)、与格は間接目的格 (～に)、対格は直接目的格 (～を) にほぼ相当する(野村 (2021) も参照のこと)。例として、OEを学ぶと誰もが暗記する人称代名詞の *he* (=he) と名詞の *stān* (=stone) を挙げる。

- (3) N *he* G *his* D *him* A *hine*

- (4) 単数 (singular) N *stān* G *stānes* D *stāne* A *stān*

複数 (plural) N *stānas* G *stāna* D *stānum* A *stānas*

現代英語では目的格は *him* だけであることからわかるように、英語は歴史が進むにつれ、対与格融合が進んだことがわかる。

なお、伝統文法や語学的な文脈では、N, G, D, A の順で並べるが(ドイツ語では1格、2格、3格、4格と呼ばれる)、言語学的な文脈では、N, A, G, D の順で並べることも多いので初学者には注意が必要である。その際、「主格と対格、属格と与格は似ているあるいは同形である」という感覚が重要である。

上述、OEでは原則、4つの格を区別すると記したが、指示代名詞、疑問代名詞、形容詞(男性・中性単数)では更に具格 (I) (～で) が区別されていた。紙幅の関

係で2つだけ例を挙げると、中性疑問代名詞 *hæt* (=what) の具格形が *hwȳ* (=why) である。日本語の「何で」(=なぜ, どうして) という感覚と一緒にある。また、定冠詞 *se* (男性), *þæt* (中性) の具格形が *py* であるのだが (もちろん現代英語では定冠詞は *the* のみしか存在しない), 現代英語の *The sooner, the better.* の関係副詞, 指示副詞 (*I like him all the better for his faults.* も同様), *nonetheless, nevertheless* などの語に「その分だけ (によって)」というニュアンスで残っている。

現代英語に話を進めると、人称代名詞以外は形態論的に主格と目的格の区別さえなくなっており ((例) *John-John's-John*), 形態に重きを置く伝統文法家の Sweet (1898) や Jespersen (1924) は名詞には**通格 (common case)**と属格しか認めない。この点、仮定法の存在の可否同様 (野村 (2019) 参照), Jespersen が Sonnenschein (1927) や Curme (1935) と争ったことは有名である。

なお、格形式は文法化しており、必ずしも主語関係、目的語関係等のみを表している訳ではない。I believe [that *he* is smart]. や I believe [*him* to be smart]. あるいは Would you mind [*me/my* smoking here]? の斜字体は格形式が異なるが、意味論的には全て主語関係を表しており、ここではむしろ、[] の節が定形か非定形かのサインとなっていると考えられる。

生成文法の格理論では**抽象格 (Abstract Case)**が仮定されており、伝統的な格 (case) と区別するため、大文字の Case を用いる。対格は多くの場合、目的格の意味で用いられており、伝統的な対格と与格を含むと考えてよい。また、斜格という用語はギリシア語文法などを含め、伝統的には主格以外の格を指すのだが、生成文法ではしばしば (2c) のように前置詞の目的格を指して使用されている。

なお主格が動詞で言う原形に当たると考える向きも多いと思われるが ((4) の単数主格 *stān* など参照), I play tennis. の play は原形と同形であってもやはり1人称単数現在形の定形と考えるのが適切である。同様に、主格と理論上の基底形 (例えて言えば、名詞の原形) も区別されるべきだと筆者は考える。それは以下のようなゴート語 (Gothic; 死語) の聖書 (4世紀頃) に *dags* (=day) のような例が存在するからである。-s は主格単数語尾と考えるべきである。

(5) 単数 N *dags* G *dagis* D *daga* A *dag* V (呼格) *dag* (下宮 1995: 118)

最後に、外池 (2019) は日本語の格助詞は英語の決定詞 (冠詞類) に相当すると主張しているが、OE の *Se cyning meteth þone biscop.* と「王様が司教に会う」は**鏡像関係 (mirror image)**が成り立ち、外池の傍証となると考えられる。

(野村 忠央)